

展覧観測レポート | BnA Alter Museum, Kyoto

VR鑑賞対話プログラム「展覧観測」は、2022年4月から公共のアートスペースでの実施を開始した。それぞれ独自の色をもつアートスペースでプログラムを実施することで、「観測」にどのような影響がでるのか、「対話」に広がり生まれるのか、そして対話の後にリアルなアート体験にアクセスすることで人々にどのような変化が生まれるのか、それらを検証することで展覧観測に広がりを持たせようというのが目的である。また地域のアートスペースと連携して観測場を増やすことで、特別な対話の場を多く作り、記録と対話する機会を増やしたいという願いもある。

本レポートはその時、その場所でしか生まれない特別な展覧観測を、活動の記録として、今後の研究材料として、残していくものである。

パブリックプログラム第1回目の記録として、2022年4月に開催した、「展覧観測 in BnA Alter Museum, Kyoto」でのレポートをお届けする。

担当：+5編集部 山際美優



BnA Alter Museum（以下、BnA）は、一般的な美術館/博物館とは異なり、ホテルという営業形態をとっている「宿泊型ミュージアム」である。「泊まれるアート」をテーマに、アートを介した物理的なプラットフォームを構築するプロジェクトの一環として、高円寺、秋葉原に続き、京都は2019年にオープンした。10階建てのビルで構成された同ホテルは、BnAの中では最大規模の施設である。ここBnAにおいては、ひとつひとつの客室がコンセプトルームとなり、ホテルのコレクションとなっている。ライゾマティクスの真鍋大度や、梅田哲也、EYヨといったアーティストらが客室を手掛け、宿泊者はその鮮烈で非日常的な空間を独り占めすることができる。また、それら31部屋のアートルームに加え、施設内にはギャラリー、ミュージアムショップ、バー、ラウンジなどが併設されている。中でも、建物内の

階段に沿った計30メートルの縦型ギャラリースペース、“STAIRCASE GALLERY”は、BnAを特徴づける独自性の高いものである。ちょうど展覧観測時には、「市場をオルタナティブに思考する」をテーマに、5人のディレクターが共同で企画した展覧会「メタモール“アルター”市場 vol.3」【1】が開催されていた。アート市場が異様な盛り上がりを見せる中、ギャラリーをショッピングモールに見立てることで、ギャラリーという展示空間そのものを自己批判するという、メタ的な展示である。

展覧観測も、展覧会・作品を単に「鑑賞」するのではなく、もう少し距離を持ってより高次から「観測」することにその主旨がある。つまり、今話題の展覧会・アーティストに関連する過去の展覧会を、現時点からそっと眺めやることだってできるわけだ。

午後19:00、BnAの2階にあるラウンジに3人の参加者が集まった。元美術館スタッフ、アートライター、元デザイナーで芸大に通う社会人学生という、アート好きの面々である。今回観測したのは、東京にあるギャラリーANOMALYの、柿落としの展覧会として2018年に開催された、Chim↑Pomによる「グランドオープン」展。参加者の3人とも、この展覧会には行っておらず、VRを体験するのは皆初めてであるという。この3人に加え、BnAのアートディレクターを務める筒井一隆氏と、ART360°インターン生の林が参加した。ラウンジに置かれた思い思いの椅子に座り、ヘッドセットを装着して、展覧観測はスタートする。コントローラーで再生ボタンを押せば、ANOMALYの展示空間が再生される。



ラウンジには「メタモール展」に出品中の作品が並ぶ。



VR体験中の様子。それぞれが展示空間に没入している。

今回のアーカイブ映像であれば、10分もあれば展覧会を一巡できる。一通り見終わったら、ヘッドセットを外し、先の映像を逡巡しながら、気になったことを言語化してカードに書き連ねてゆく。全員が書き終わると、ひとつのテーブルを囲み、各々のカードを広げる。展覧会についての参加者の所感としては、「よく分からなかった」、「VRで見ることに注意がいきまいて、作品をちゃんと見れなかった」等、困惑や戸惑いが伺えた。この「わからなさ」や漠然とした「モヤモヤ」を起点に、議論を始める。バラエティ豊かなカードが出揃った。「にんげんレストラン」や「スクラップ&ビルド」等、展覧会内で出てきたワードを改めて記したもの、「不安定」や「恐怖」等そこで感じたものを率直に書いたもの、他にもイラストや疑問符が付いたもの等々……。疑問や感想を共有しながら、徐々に霧を晴らしてゆく。

なぜ展示空間の中に〈土〉があるのか、これはホワイトキューブに〈外〉を取り入れる試みなのではないか、「ハッピーズプリング」展では美術館内に〈道〉がインストールされていた云々、というように議論は次々と展開を見せる。「キャプションがない状態で作品をどう読み解くのか」に関心があり、今回の「グランドオープン」展を観測対象に決めた筒井氏。参加者からは、「鑑賞中はどうしても言葉を探してしまう」という声や、「直接的に解説があるのではなく、それぞれの作品が補完しあって思索を喚起させる見方が好き」との声が上がった。展覧会において作品へのキャプションはどうあるべきか、普段どのような鑑賞の仕方を心がけているか等、日常ではあまり話すことのないような会話が広がった。事前予習派、キャプション見ない派、自分の関心そのものを読み解いていく派等、各人のこだわりは興味深い。



出揃ったカードを元に、展覧会を見て感じたこと・考えたことをシェアする

展覧観測を終え、階下のバーに移動。お酒を嗜みながら、参加者同士の交流を深める。映画を観に行った友達と、その後カフェで感想会をするような感覚を思い起こさせる。そして、当観測所の目玉、筒井氏によるBnAのアートルームのガイドツアーを敢行。本来宿泊者しか体験することのできない、BnA屈指のコレクションである【2】。案内してもらったのは2部屋、中野裕介／パラモデルによる「鳥は池辺の青樹に宿し 魚は月下の青波に伏す（五条河原の模型楽園）」と、Mon Koutaro Ooyamaによる“NEXTEFX”。壁や天井に設えられたディテールは見る楽しみを飽きさせず、照明を変えることによって変化する空間は映像インスタレーションさながらである。展覧観測後の実際のアート鑑賞は、いつもより刺激的だ。筒井氏からは、「また、展覧観測をやりましょう」とのお声掛けを頂いた。一過性のイベントとして終わらせるのではなく、定期的に続けていくことに意義があるのだと実感する。回数を重ねることによってこそ、よりよい観測体験と多様な対話が生まれるはずだ。



展覧観測後、階下のバーに移動。ここにも作品がたくさん置かれている。



中野裕介／パラモデルによる「鳥は池辺の青樹に宿し 魚は月下の青波に伏す（五条河原の模型樂園）」、それぞれバラバラの方向を見ているのが面白い。

今回の展覧観測は、パブリックスペースで行う初の試みである。「宿泊型ミュージアム」で行う性質上、宿泊客がふらっと参加できるような催しになれば良かったが、どうやら旅行客の夜19:00からの予定は詰まってしまっているようであった。いずれにせよ、今回の展覧観測を機会に、参加者がChim↑Pom並びにBnAへの興味関心を深め、VRヘッドセットへの鑑賞体験を通して今後の芸術鑑賞について自問したり人とそれを共有するきっかけとなれば幸いである。とりわけ筆者は、「グランドオープン」展の会場にもなったANOMALYで開催された、Chim↑Pom改名後初の個展「Chim↑Pom from Smappa!Group」展との比較検討を試みたいところである。展覧会は、〈今〉を如実に反映する反面、長くとも3ヶ月も経てば新たな展示に入れ替わってしまう。過去をそっと眺めやる視点は、同時に現在を俯瞰して見る視点を獲得できる助力となるのかもしれない。

BnA Alter Museum, KyotoのHPはこちら

<https://bnaaltermuseum.com/>

注釈

【1】メタモール“アルター”市場 vol.3

本展は「市場をオルタナティブに思考する」ことをテーマに掲げて2020年にスタートした、ディレクターズアートフェアである。既存の枠組みに囚われないディレクションを展開するディレクターやキュレーターたちが参加。彼らを選出した15名の作家で展覧会は構成される。

＜参加ディレクター＞

筒井一隆（BnA Alter Museum）、吉田山（FL田SH）、武部敬俊（LIVERARY）、佐久間磨（Rondade）、黒田純平（keshik.jp）

＜参加アーティスト＞

金田金太郎、菊池和晃、時吉あきな、HOME ECONOMICS EXPERIMENT、vug、大橋裕之、on-demand、System of Culture、サカイケイタ、清水美於奈、高橋美衣、野田ジャスミン、beewaa、中田有美、松田将英

【2】BnA Alter Museum, Kyotoの Art Room は、「Permanent Exhibition」として、宿泊客に限定して恒常的に公開されている。

<https://bnaaltermuseum.com/rooms/>

あとがき（+5編集長）

展覧観測は、ART360°がアーカイブした展覧会についての検証と対話を目的として2019年に作られた、鑑賞教育プログラムである。360°映像を元に制作されるデジタルアーカイブの性質を踏まえ、VRヘッドセットを使用して鑑賞を行う、特異な鑑賞プログラムである。

2019年には比叡山中学校で実施するなど、広がりを見せかけていた同プログラムも新型コロナウイルスの影響で約2年、公共の場で実施することがほとんどできず、且つソーシャルディスタンスを取って少人数制で実施をしていた。

2022年4月、いまだ出口の見えない状況の中、公共のアートスペースでの実施に踏み切れたのは、BnA Alter Museum, Kyotoのアートディレクター、筒井一隆さんの「新しいアート体験を、協力して提供していきたいね」という一言があったからである。BnAのコンセプトや空間にあった展覧会を共に選定し、打ち合わせを重ねて無事に開催となった。想定していたよりも少人数となってしまったが、ゆえにひとりひとりがリラックスした雰囲気の中で発言ができ、対話を深められたように思う。観測後の館内クルーズでは動性のある対話がなされ、Art Roomの天井や細部を参加者が見る様は、まさに星を観測しているようであった。

アールスペースに合わせた鑑賞対話やプログラムの作成など、課題が多く見えたことも事実ではあるが、対話が広がり変化することでイベントが成長する可能性も十分に感じたものであった。

ART360°としても初めての取り組みで、企画としても未完成な部分も多い中だったにもかかわらず、快くご協力いただいたBnA Alter Museum, Kyotoさん、そして何より展覧観測に可能性を感じ、実施にご協力くださったディレクターの筒井さんに心から御礼をを申し上げたい。